

# 朝の太陽



創作児童文学

# 朝の太陽

大蔵宏之著



## 朝の太陽

---

創作児童文学

第1刷／1968年7月

第7刷／1977年12月

著者／大蔵宏之

発行所／株式会社 金の星社

〒111 東京都台東区小島1丁目4-3  
電話／東京03-861-1506（代表）  
振替／東京0-64678

印刷／有限会社協栄印刷所  
製本／東京美術紙工

乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社営業部宛ご送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

## ■著者紹介

---

おおくら ひろゆき  
大蔵宏之

1908年、奈良県に生まれる。  
関西大学に学びNHKに勤務  
し、学校放送部長として活躍  
する。「戦争っ子」「ぼくは負  
けない」「朝の太陽」など、児童  
文学の作品が多い。

---

913 大蔵宏之  
朝の太陽  
金の星社 1977  
287 P 22cm（創作児童文学）

---

基本カード記載例

8393-012031-1406

はじめに／著者

少年は太陽だ。少女は朝だ。

少年少女は、朝の太陽だ。

きみたちは、日の出のように、

あかあかと、勢いよく、

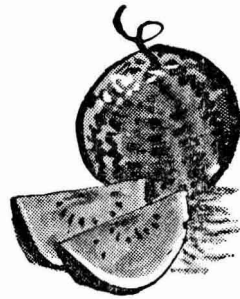
まっしぐらに大空にのぼる。

まぶしい光を、あたりいちめん<sup>めん</sup>にまきちらして。

清、正、進の三兄弟も、

朝の太陽のように、すがすがしい心の持ち主だ<sup>ぬし</sup>。

きみたちは喜んで仲間<sup>なかま</sup>に入れてくれるだろう、きっと。



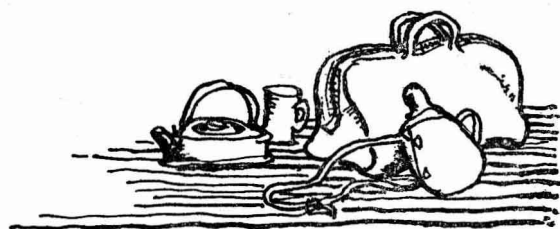
■もくじ

はじめに 1

朝の太陽 6

すばらしい夏 22

快晴かいせいの日に 39



幸運の女神めがな 61

調子ちようしにのって 83

まぶしい 111

暑い暑い 135

急げ急げ 155

海岸線かいがんせん 178

旅は道づれ 195

太陽も人も 221

思いがけなく 240

こんにちは東京 259

あとがき 286

■そうほん／さしえ 市川禎男



創作児童文学  
朝の太陽

大蔵宏之著





## 朝の太陽

真夏まなつの太陽が、かんかん照りつけて、むんむん、むせかえるような暑さだが、モクセイとモミとカシと、三本の庭木にわぎの投げかける木かげには、すずしいそよ風がふいている。

その木かげに、三台の自転車をかきかき立って、三人の少年が、せつせと手入れをしている。右から高校一年の長男清きよし、次は中学二年の二男正ただし、それから小学六年の三男進すすむである。

三人とも、あせばんだ顔がかがやかせて、スパナでネジをしめたり、油差あぶらさしをあっちこちにつっこんだり、ボロきれでていねいにぬぐったり、真剣しんけんなまなざしで、せつせと手入れをしている。

清が、いちばん先に手入れを終わったとみえ、強く前輪ぜんりんをまわした。

クル　クル　クル　クル……

車輪は、かるやかに、いつまでもいつまでもまわりつづける。

「うん、いい調子ちようしだ。」

清は、うんとこさと、自転車をひっくりかえして、こんどはペダルをふんで、後輪こうりんのぐあいをし



らべた。

クル　クル　クル　クル……

後輪も、かるがると、いつまでもいつまでもまわりつづける。

「うん、これでよしと。……正と進のはどうだい？」

「ぼくも、手入れが終わった。」

「ぼくもだ。」

正と進が答えると、清は、自分の車にしたと同じように、弟たちの車も点検してやった。

「うん、正のも進のも、とても調子がいい。まるで新車みたいだ。」

清は、並んだ三つの自転車をながめまわしていった。

「これなら、日本一周だって、アフリカ大陸横断だってできそうだね。」

正も、大喜びだ。

「でも、ぼくのこれ、女の自転車だろ。ぼく、いやだなあ。」

進は、兄たちのにくらべて、自分の自転車が、ひどくきゃしゃにできているのが気にいらな  
しい。

「あれっ、進はその自転車が気にいらないの？　これは、おかあさんが婦人会の役員になったと

き、おとうさんがおかあさんに買ってあげたものだけど、婦人用なんかじゃないよ。むかしは婦人専用の自転車があったらしいが、いまのは男女の区別なんかないんだ。ぼくたちのは実用車だけ。それはサイクリング用なんだ。いちばん乗りごこちのいい自転車なのに、なぜ気にいらないの？」

清は、あきれ顔で進にきいた。

「進、それが気にいらぬのなら、ぼくのと取りかえてやるよ。清にいちちゃんのは、高校入学以来、毎日通学に乗ってきたんだから、だいぶくたびれてるし、ぼくのは、ライトバンを買う前に、おとうさんが愛用してたのをぼくがもらって、それから二年たったから、同じほどおんぼろなんだよ。町の人なら、とくにポンコツ屋へ渡わたしているしろものなんだぜ。ちょっとくせがあるから、乗りつけないものには乗りにくいが、よかったら喜んでとつかえてやるよ。」

正も、自分の自転車を進のそばに持っていった。

「ぼくらののは、実用車だから、見たところがんじょうそうだけど、どちらも、あっちこっちの部品を、なんべんも取りかえて、やっと乗れるようにしているおんぼろ車だ。それにくらべて、それは、おかあさんがほんのちょっとしか乗らなかつたから、新車とかわりがないんだよ。いちばん乗りごこちのいい自転車なんだぜ。」

「そう、それを買ってまもなく、ライトバンを買ったし、電話がひけたので、おかあさんの婦人

会の用事は、たいてい電話でまにあつたし、遠くへ出かけるときには、おとうさんにライトパンで送り迎えむかをしてもらつたから、おかあさんは、数えるくらいしか乗らなかつた。進、それでも取りかえてほしいかい？」

清と正が、こうつけたしたとき、進は、首を横にふつた。

「ううん、ぼく、これでがまんするよ。」

進は、がまんするなんていったが、ほんとうは、兄たちの話をきいて、うっかりかえられないと思つたのだ。

ところで、清、正、進の三兄弟が、そろつて自転車の手入れをしているのは、こういうわけなのだ。

きょうは日曜日。三人とも寝ねぼうをきめこんでいたが、とうとうおかあさんにたたき起こされた。

「いいかげんに起きなさいよ。おとうさんは、もうとくに仕事にいったわよ。」

この三兄弟は、日曜日というと、そろつて朝寝あさねをするのがおきまりなので、おかあさんは、口ほどにおこっているわけではない。ちょうどいいくらい寝ぼうをさせて、やっと起こしたのだ。

「さあ、もうすぐおいしいおみおつけができるから、顔を洗あらった洗あらった……」

おかあさんが、念ねんを押おすようにいうと、



「これは寝すぎた、しくじった。」

「いやいや、ぐっすり眠ねむっていい気  
持ちだ。」

「寝る子はまめだよ、かあさん喜  
べ。」

三人とも、こんなじょうだんをい  
ながら、さっと飛び起き、カラスの行  
水びみために、一分とたたないうちに洗せん  
面めんをすませ、食卓しょくたくの前にすわった。

「おかあさん、早いとこたのむね。」

「おみおつけは、さっと煮立にったと  
ころが、いちばんうまいんだから。」

「ぼくは、そんな年よりみたいに、  
おつけの味なんかどうのこうのといわ  
ないけど、おなかがペコペコだ。早い

とこ早いとこ……」

三人とも、かつてなことをいって、おかあさんをせきたてた。育そだちざかりの三人、いずれおとらぬたくましい食欲しょくよくだ。競争きょうそうでもしているみたいにもりもり食べて、たちまちおひつをからっぽにしてしまった。

「おい、正と進、ちょっと相談があるからこいよ。」

清が、弟たちをよんだ。

「相談ってなあに？」

「おとうさんのお手伝てつだいにいかなくていいの？」

正と進がきいたが、清は、さっさと表へ出ていく。正と進がついていくと、清は、中庭ちゅうていの半畳敷じようじきもある大岩のところへいって、どっかとしをおろした。

「まあ、すわれよ。」

「こんなところへ連れてきて、相談ってなんなの？」

と、正が岩の上にあぐらをかいてきいた。

「わかった。清にいちちゃんは、何かムホンを起こす気だね。」

と、進も乗りだしてきた。

「人もうらやむ平和なわが家だ。ムホンなんか起こす気はないよ。いよいよ夏休みが近づいたから、計画をたてようってだけのとき。」

清がそういうと、正は、なーんだ、そんなことかというような顔をして、

「ぼくの計画は、水泳だ。ぼくもいまに水泳の名門五条高校へいくことになるんだから、今から中学校のプールで泳ぎまくって、入学と同時に、選手になろうと思ってるんだ。」

と、まくしたてた。

「ぼくは、水泳選手になるには少し間があるから、登山したいんだけど、清にちゃん連れてってくれないかな。ヒマラヤ征服のテレビを見て、ぼく、わくわくしてんだ。ぼくにはヒマラヤはむりだと思うけど、日本アルプスでも富士山でも、それもだめなら、大峰山でいいから、ね、連れてってよ。」

こんどは、進がこういった。

「うん、ふたりとも、それぞれ計画をたてるんだね。どれも悪くはないが、ぼくは、もっとすばらしいことを考えてるんだ。」

清は、弟たちの顔をのぞくようにしていった。

もっとすばらしいことと聞いて、正と進の目が光った。



「ね、どんなすばらしいことなの？」

「早くいってよ。」

ふたりはせきたてたが、清は、落ちつきはらっていった。

「ぼくたち三人で、自転車旅行をやるうじゃないか。」

「なんだって、自転車旅行？」

正は、なあんだばかばかしいといった顔つきだ。

「今どき自転車旅行なんて、はやらないよ。」

進も、てんで魅力なしという顔だ。

「うちにはライトバンがあって、夏の間は、そう毎日使うわけじゃないんだから、旅行するんなら、おとうさんにたのみこんで、あれを借りていこうよ。」

と、正がまたいった。

「今はネコもシャクシも自動車旅行をやっている。そんな人並みのことに、ぼくは魅力がないんだ。マイカー時代だからこそ、自転車旅行がおもしろいんじゃないか。ぼくたち三人とも、自動車の運転は、おとなに負けないほど達者だ。だけど、かんじんの免許証がないじゃないか。無免許運転なんかやると、すぐとっつかまるよ。」